

くくく

「オ、いや、の。露路を四ツ這ひに這ふてるワ。阿呆な事しいなや冷えが入たら又腰が痛ふなるで」

「そ、八釜しふ云ふたらどむ成らんナ。俺一人で大勢の足音さ、ん成らん。兩方の手に下駄履いて、足で草履引摺てるね。こつちの膝は草鞋わらじの古いのが縛り附けたアるねけど、片つ方は何も無い、依つて竹の皮が卷いたアる」

「なんやガサく云ふと思たら、あんな事してるねワ、モウえゝ加減にしときんか」

「オ、溝が有るぞ、氣イ附けて来いよ……ヨ。シヨ。シヨ。シヨ。……サ、井戸端へ持て往け



氷が張てる依て迂らん様に、えゝか……ヨシく、オ、宜かる。ジイワリ降ろせ……オツト……良しやく。傾いた無いが。チヨツと支い物せえ。其處に瓦層かが有るやろ。オツト大き過ぎる、そつちのんと變えて見い。ヨシ宜かるく……へエお早ふさんで……どふぞ宜しふお頼み申します……(上へ飛で上て蒲團の中へ這入る) 噯、早ふからワチャく八釜しい何やねナ」

「オ、嫌やゝの、もう上へ上つて寢間へ這入てるワ、まだ寢たら不可んし」

「寝るのんと違ふ哩、俺一人で賃搗屋と早替りせんならん」

「餅屋かいナ、多量よほも搗かん餅ぢや、早ふから眠むたふてドムならん、二三軒廻て来て貰え……(飛で降りる)へエ、お内儀おんげが一番釜と仰有たので順番を無理して一番を廻したんでやすネ。先に他へ廻りますと道順の都合で日が暮れるやろと思ひます、折角来ましたんやさかい、何なら今搗かして頂き度ふおますネ……(ゴツン)アツ痛たゝゝゝ」

「どない仕たんや」

「飛で上る思ふて、上り口で向ふ脛打たんや」

「チヨカくする依てにや」

「おい噯。そんならまア搗いて貰え、餅屋はんも寒いやろ、一杯飲ぬで暖もつて貰え、……何。上の樽